

## 人の子は天国と共に来る

### マタイによる福音書16:21-28

イザヤ55章8節にはこのように書かれています。

「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。」  
私は、この言葉は私たちクリスチャンたちが必ず信仰の前提として受け入れなければならない言葉だと思います。思ったより多くの人々は、神を自分自身に合わせる傾向があります。人々は自分を助けてくれる神、自分の必要性を満たしてくれる神を望んでいます。私も、私たちが信じている神さまが、このような神さまになって欲しいと思ったことがないわけではありません。しかし神さまは、ご自分の思いは、私たちの思いと道と異なると言われました。そして今日の福音書でも、イエスさまの思いは、私たちの思いと違うということが示されています。今日の福音書21節をみましょう。

「このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」

今日の福音書は「このときから」という言葉で始まります。

「このときから」はいつからでしょうか。先週の説教で分かち合ったように、イエスさまは皇帝と領主の名がついたところ、ローマ神殿と皇帝の神殿がある所で、ペトロから「あなたはメシア、生ける神の子です」という信仰の告白を聞かれました。そしてイエスさまは、このペトロの信仰告白の上に、陰府の力が対抗できない教会を建てられる、天国の鍵を授けられると言われます。そして、このときから、イエスさまはご自分に起こることについて言われました。エルサレムに行つて、苦しみを受けて殺され、三日目に復活するという話です。ところが、この言葉を聞いたペトロの反応は意外でした。ペトロは、イエスさまをわきへお連れして、いさめました。

「すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。『主よ、とんでもないことです。そんなことがあつてはなりません(22節)。』」

おそらくペトロは、イエスさまがエルサレムに行かれることまでは喜んだと思います。

しかし、エルサレムに行つて得られる苦しみと死をペトロは受け入れることができなかつたようです。今、エルサレムという所は聖地として認められている場所です。世界的に大きな宗教であるキリスト教とイスラム教、ユダヤ教の聖地がエルサレムです。過去、キリスト教とイスラム教はこの聖地を占めるために、約200年ほどの戦争を行いました。それが有名な十字軍戦争です。イエスさまの時代でも、エルサレムは、神殿がある所、またメシアについて旧約聖書の預言がある所として、人々に希望を与えた場所です。ゼカリヤ9章9節では、エルサレムについてこのように書かれています。

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者…」

当時の人々は、この預言に敏感でした。

ユダヤの崩壊の後、数百年の間、他の国によって治められて来たユダヤ人たちは、独立を望んでいました。神さまは自分たちのために、王（メシア）をお遣わしになるのだと思い、この預言通りに、その王がエルサレムに来て、ユダヤ人を救ってくれるのだと信じていました。ダビデがエルサレムを中心にして、強くて豊かな国を作ったように、ローマからエルサレムを取り戻し、ローマと結託した者たちには、裁きが下るのだと思いました。そして、その王を中心にして、イスラエルが豊かな国になるように願いました。イエスさまの弟子たちも同じでした。弟子たちは、イエスさまが神さまがお遣わしになった王だと思いました。だからペトロは命をかけて、イエスさまをメシア、神の子ですと告白したのです。ところが、イエスさまはペトロが思っている、いや、すべてのユダヤ人が思っているメシアのようになさらないと言われます。エルサレムに行つて、ローマと結託した祭司と長老たち、律法学者たちを裁かれるのではなく、むしろ彼らの手によって殺されると言われます。もちろん、三日目に復活するとおっしゃいましたが、この話がペトロの耳に聞こえるはずはありませんでした。聞こえたとしても、死んだ人の復活は、当時のペトロが理解できるものではありませんでした。だから、ペトロは「そんなことがあつてはなりません」とイエスさまにいさめたのです。

するとイエスさまは、ペトロをお叱りになりました。23節の言葉です。

「イエスは振り向いてペトロに言われた。『サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。』」

ペトロは、この言葉を理解することができなかったでしょう。なぜ自分がイエスさまに叱られるかが分かりませんでした。しかし、イエスさまにとって、エルサレムでの死は大事でした。ご自分の死によって、すべてのことを和解に至らせるからです。神と人間、正義と罪、支配者と被支配者、ローマ(異邦)人とユダヤ人、イエスさまの死は、このすべての葛藤を解消させ、和解させる鍵でした。しかし、ペトロは、これを引き止めました。自分たちだけのこと、ユダヤ人たちだけのことを思ったからでしょう。

先週、私はペトロがすべての信仰の告白者の代表者だと申し上げました。

ペトロが告白したその信仰の上に教会が建てられ、その教会に天国の鍵が与えられたと申し上げました。ところが、その代表者が自分たちだけのために、イエスさまをいさめたのです。すべての人のためではなく、極めて利己的なことでした。それでイエスさまは、ペトロに「あなたは人のことを思っている」と言われたのです。このようなことは、私たちの周りでも頻繁に起こっていることです。多分、自分の利益を思って、自分中心に決定することは、本能かもしれません。

しかし、イエスさまは、ご自分の公的な生涯の間、この本能と立ち向かわれ、勝たれました。

イエスさまは、ご自分の公的な生涯が始まると、すぐに40日間の断食をなさいました。そしてユダヤの荒れ野で、悪魔に誘惑を受けられました。悪魔の誘惑は3つでしたが、これはすべて人間の欲と本能に関するものでした。イエスさまは「ただ主に仕えよ」という言葉で、最後の誘惑までも勝たれました。ただ主に仕えること、これがイエスさまのご生涯でした。すべてを神さまの言葉と合わせられ、十字架の死に至るまで従順でした(フィリポ2:8)。

信仰はこのようなことだと思います。

自分の心に神さまの言葉を合わせるのではなく、神さまの言葉に自分を合わせることです。それで、イエス様はペトロに、「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われたのだと思います(24節)。自分を捨てないと、自分の十字架を背負わないと、神のことを思わず、人間のことを思うしかないからです。信仰の人である私たちにとって、最も大事なことは何でしょうか。イエスさまに従うことでしょうか、それとも、イエスさまを利用して、私たちの益を得ることでしょうか。イエスさまは「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか(26節)」とおっしゃいました。信仰の本質は、益を得ることにあるではありません。

最近何人かの牧師たちと一緒に礼拝について勉強しています。

先週から礼拝の歴史を勉強していますが、初代教会の礼拝を研究しながら、当時の洗礼と入信について、いくつか新たに分かったことがあります。

1. 洗礼を受けるためには、多くの時間がかかった(入信してから教育期間約3年)。
2. 入信するためには、現在の世界を選ぶのか、それとも、信仰の世界を選ぶのか答えなければならなかった。
3. 兵士の場合は、入信が不可能なことではなかったが、殺人をしないという約束をしなければならなかった。階級が高い兵士は、兵士をやめる前までは、入信することができなかった。

異教徒関連職業、占う職業、売春に関する職業に働いている人も同じだった。

今とは全く違う状況ですね。ところが、驚くべきことは、このような厳しい条件にもかかわらず、信徒が増えていったということです。ルーテル神学者ロドニー・スタークによると、キリスト教がローマの国教になる前、キリスト教は10年ごとに40%ずつ増加したそうです。多くの人々は、迫害にもかかわらず、教会の厳しい条件にもかかわらず、自分たちの信仰生活に十分満足したということです。このような驚くべきことがどのようにして可能になったのでしょうか。人のことを思わず、神のことを思っていたからだだと思います。

28節に、イエスさまは、「人の子は天国と共に来る」とおっしゃいました。

信仰は、私たちに全く違う世界観をもたらしてくれます。この世界が教えてくれる世界観ではなく、この世界では経験することができない世界観をもたらしてくれます。しかし、この世界観を通して、私たち信仰の人は十分に満足することができ、信仰による有益がなくても、幸せになります。なぜなら、イエスさまは、

すなわち信仰は、天国と共に、私たちに来るからです。この信仰による満足が皆さんにありますように。